

## 書評01

高橋恵子 著

# 『絆の構造～依存と自立の心理学』

講談社 / 2013 年 9 月刊 / 224 ページ / 740 円 + 税  
ISBN 978-4-0628-8224-8

評者：齋藤 真緒  
立命館大学産業社会学部准教授



本書は、次のような一節から始まる。「日本人は自分の意思に反して、血縁、家族縁、地縁、社縁などに縛られすぎていないであろうか。他者とうまくコミュニケーションがとれることを高く評価し、他者との会話がなことを問題視するような、対人行動についての社会通念に翻弄されすぎていないであろうか」(3頁)。この指摘に対して、胸を張ってノーと言える日本人が果たしてどれくらいいるだろうか。本書は、「空気を読む」ことを強いられてすぎている私たち日本人のつながりを、著者の専門分野である生涯発達心理学を中心とする理論および調査データに基づいて検証している一冊である。

本書では、絆の「仕組み」を問い直す理由を以下の三点に求めている。まず、つながりたい人を選ぶのは個人であり、個人を出発点としたつながりのありようを検討する必要があること。第二に、他者に対して、頼りたいという依存要求と、自立要求という相反する感情を見据え、この二つの両極の感情を両立・調整させる方法を知ること。第三に、つながりを強制される日本人は、人間関係のトラブルを抱えていることが多いため、そこから立ち直る方法を知るためである。

本書の構成は以下の通りである。

序章 人間関係の神話

第一章 日本の家族の現在

第二章 母子関係は特別か

第三章 仲間・友人・恋人との関係

第四章 定年からの人間関係

第五章 人間関係の仕組み

第六章 人と人をつなぐ

二章までは、私たちの人間関係にまつわる神話の検証である。神話の中で大きな部分を占めているのは、家族の絆を重視し相互扶助を求める家族主義であり、それがいかに私たちの行動だけでなく社会制度にも浸透しているかが、具体的な統計調査から示される。さらに、ジョン・ボウルビーによって「科学的根拠」を付与された母子関係にまつわる素朴信念—「三つ子の魂百まで」—を批判的に検証し、人間の発達は生涯にわたって柔軟であると結論づけている。三章と四章は、柔軟に変化する人間関係の具体例として、友人・恋人との関係の多様化と、定年後の人間関係を取り上げている。自分が帰属する集団の中でみんなと仲良くすることを推奨される日本の文化に対して、人間関係を選択することの重要性が対置される。五章六章は、私たちの人間関係の「仕組み」を理論的に解説しながら日本人のつながり方をめぐる課題を提起している。具体的には、「親しい人」と「親しくない人」との大きな溝を挙げている。つまり、家族などの近い人間に対する強い同質性と協力関係を求める一方で、「見知らぬ他者」に対する無関心が、幅広い社会的連帯を困難にしている。この問題を解決するために、著者は「社会認識の研究と実践の重要性」を指摘し、教育場面などでの具体例を提示しながら、つながり

を広げる可能性を探求している。

東日本大震災以降、政治的レトリックとしての「絆」という言説が氾濫している。本書は、つながりを無批判に奨励するのではなく、その仕組みを理論的・実証的に検討した上で、新しいつながりの可能性に寄与しうる実践的提起も含んでいる点において高く評価される。近代的な人間像が重視してきた個人の自立という価値は、ケアされること＝依存することを低く評価することと表裏一体となっている。このことは、すべての人間が傷つきやすい存在であり、生老病死といった人生の局面において必然的に他者に依存せざるを得ない存在であるという素朴な事実を忘却させてしまう。未曾有の高齢社会を目前にして、依存を自立の前提として位置づけ、個人の選択を出発点とした愛着関係を構想する本書の意義は大きい。

その上で、ふたつの課題について検討してみたい。

ひとつは、依存を媒介とする関係の非対称性とそれを支える社会的しくみについてである。たしかに愛着関係は人生を通じて可変的でありうるが、児童虐待やDVに象徴されるように、重要な他者との愛着関係は、しばしば支配や暴力を包含している。愛着関係が支配－従属関係に転化すると、そこから自力で脱却するのはきわめて難しい。また著者は、伝統的な家族主義に安住することなく、「おひとりさまがおひとりさまであることを大事にしながらつくる」(187頁)快適な人間関係を探ることの重要性を唱えている。この点は大いに同意できるが、その実現には、個人を支えるセイフティーネットが必要となり、自助の比重を強化しようとする現在の日本の社会保障では、他者とつながれない人が出現してしまう可能性がある。個人の選択を保障する社会的しくみ、良好な愛着関係の構築のためには、第三者が関与しうるより開かれた関係性、たとえば親や介護者といった、依存を支えようとする担い手への支援のあり方を

検討していく必要があるだろう。

もうひとつは、愛着関係の先に構想される「実際には会ったことがない人、これからも会うことがないであろう人々とのつながり」(215頁)についてである。著者自身も認めているように、「見知らぬ他者」への想像力や共感力を滋養するための、正確な知識に基づく社会認識を醸成することは非常に難しく、その実現には多大な時間を要することは想像に難くない。「見知らぬ他者」とのつながりが広がるのではなく、逆にこうした人々との分断が深刻化する事例も少なくない。たとえば、ヘイト・スピーチやいじめ行動に現われているように、帰属集団内における同調圧力は、異分子の徹底的な排除によって強化される。また、保育園に対して近隣住民が騒音対策を要求していることもメディア報道で取り上げられている。自分が子どもであった時に多くの人に支えてもらっていた経験の忘却、想像力の欠如である。

また逆に、私たちの生活に不可欠になりつつあるインターネットによって無限に拡大しつつあるつながりをどう考えたいだろうか。これまで不可能であった空間的近接性に縛られない他者とのつながりは、対面的な相互行為を基盤とする愛着関係に、どのような変化をもたらしうるのだろうか。不特定多数の他者を簡単に傷つけうる両義的な社会空間としてのインターネットを媒介としたつながりを今後注視していく必要があるだろう。

私たち自身の人間関係を見直し、家族や身近な他者に対する自らの脅迫観念や過度な期待を見直すと同時に、目の前にいない今はまだ見知らぬ他者に、できるだけ想像力を持って接する努力をする、こうしたミクロな政治の積み重ねこそが求められている。その意味で本書は、私たち自身のつながりの足場を再点検すると同時に、未知なる出会いへの一步を踏み出すためのヒントを提供してくれる良書だといえよう。